

市民学コース 富士見の歴史 6000年の富士見の歴史を展望する

第2回 海辺に暮らした縄文と 農耕文化の幕開け

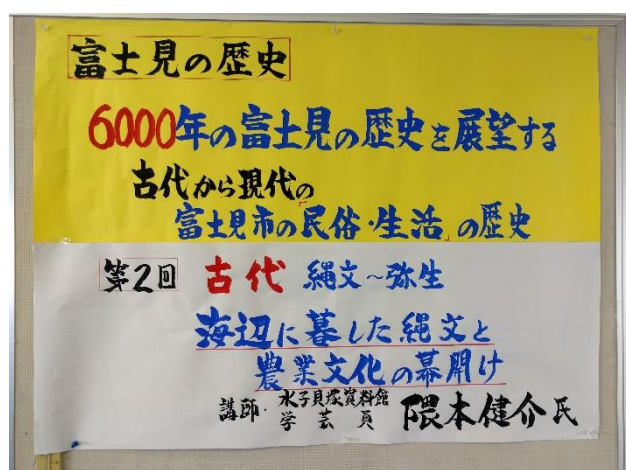
平成28年6月18日(土) 10時～12時 鶴瀬公民館 第3集会室

講師 水子貝塚資料館 学芸員 隈本健介氏

前回は「富士見」が誕生する経緯を学びました。

今回からは古代から中世、近世・近代と順を追って学びます。

第二回は 41名の受講者の参加を得て「海辺に暮らした縄文と農耕の幕開け」と題して、水子貝塚資料館学芸員の隈本健介氏が講義されました。



1. 今から3万年も前の「人の活動の痕跡」が富士見市（勝瀬中沢遺跡・ふじみ野駅西口あたり）で見つかりました。「人」は水の得やすい近くの「台地の上」に暮らしを求めていました。海と川、湧水が育んだ「ムラ」へと発展していきました。富士見市には大小の「川」が数多くありました。

2. 縄文時代のものとされているものは6期に分けることができます。縄文草創期は八ヶ上遺跡をはじめ羽沢、宮廻、南通遺跡、早期のものは栗谷津、打越など、前期のもの打越、水子など、中期のもの羽沢、松ノ木、中沢、栗谷津など、後期のもの打越、本目など、晩期のもの正網の各遺跡です。



富士見市は早期、前期、中期の遺跡が多い、住居跡は前期に大規模な遺跡、後期は遺跡の数が極端に減り、晩期は正網遺跡です。遺跡の名は”字名”の地名からとって名付けます。

3. 自然環境の変化による海進は温暖化と寒冷化による海進と海退が起こります。

木が針葉樹から落葉広葉樹に変わり海が進出した関東地方内陸部に奥東京湾、古入間湾、古鬼怒湾が形成された。その後寒冷化で海退が始まり、7300 前鹿児島鬼界カルデラで大規模の火山噴火

4. 生活様式の変化 土器の発明は、煮炊きが可能となり、摂取する栄養が増大ー 身体が丈夫、骨格が強くなっていった。弓矢の発明、落とし穴などで小動物が捕らえられる。そして定住化が進み「集落」が形成されていきました。

主食は木の実（ドングリ、クルミ、クリ・・・）で、貝は富士見市ではヤマトシジミ、ハマグリ、カキなど。貝塚は汽水域ではヤマトシジミ（あさりくらいの大きさ）が8割、9割でした。

関東が貝塚の密集地で全国で約 2000 か所の半分があり、富士見市には貝塚は 16 か所あります。代表されるものは水子貝塚、打越遺跡（案内板が無いのは残念）



弥生時代に入って

稲作が始まりー農機具の発展などで、生活様式（暮らし）が急速に進化していく、集落ー南通遺跡（針ヶ谷小学校）の環濠集落、北通遺跡の方形周溝墓（古墳の前身）など時代は古墳時代へ

柳瀬川流域と谷津田周辺に大規模な集落跡が形成され、古墳時代の後期集落の形成の中心は志木市にありました。

最後に 3 万年～6 千年前の”富士見市”の先人たちの自然環境変化の中での「生きるロマン」の姿に歴史のすばらしさを感じた時間でした。

講義時間が大幅にオーバーしたことはスタッフの不手際で申し訳なく反省をしております。

○遺跡の一覧は市のホームページ

TOP > 観る・楽しむ・学ぶ > 教育委員会 > 生涯学習について > 遺跡台帳をご覧ください。

以下 説明資料を参照願います。

市民大学 ⑥富士見の歴史

2016年6月18日

6000年の富士見の歴史を展望する

古代から現代の「富士見市の民俗・生活」の歴史

海辺に暮らした縄文と 農耕文化の幕開け

水子貝塚資料館 隈本健介

はじめに

- 富士見市で見つかった人の活動の痕跡は、今から約30,000年前
- 富士見市勝瀬の中沢遺跡、富士見市鶴瀬東の谷津遺跡で、それぞれ約30,000年前の遺物（石器）が見つまっている。
- 人が活動した痕跡の残る場所のことを遺跡といいます。
- 遺構...住居跡、墓、城、溝、穴（土坑）水田跡、水路
- 遺物...土器・石器・木器・骨角器・金属器などの道具類

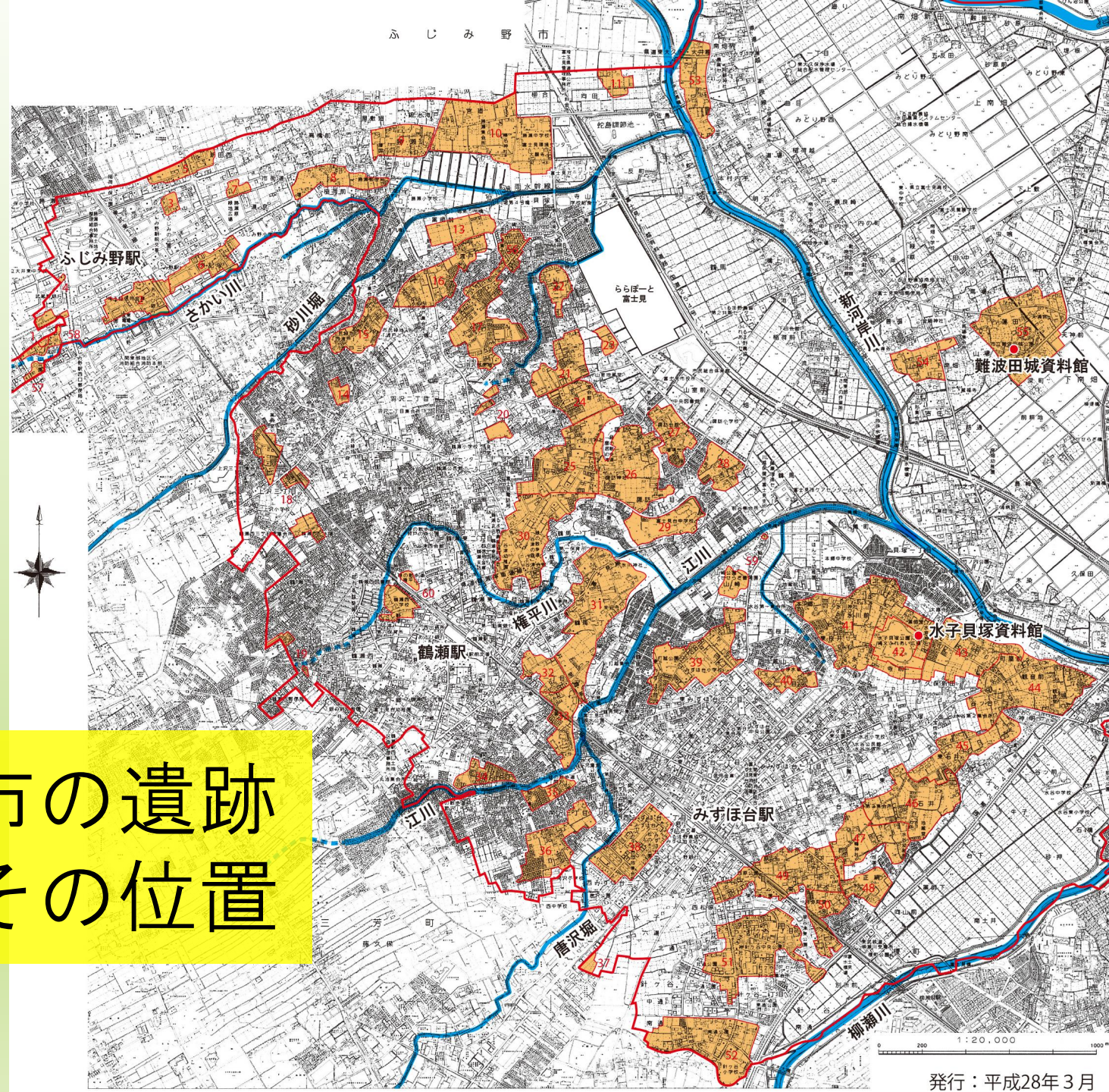


遺跡で見つかる遺構や遺物の特徴

- 埋蔵文化財は、地面に刻まれた跡しか残らない
- 後世の人による攪乱や、地面に近い所の痕跡は残らない
- 全体の一部が判明するだけなので、全体が見つかっているのではない



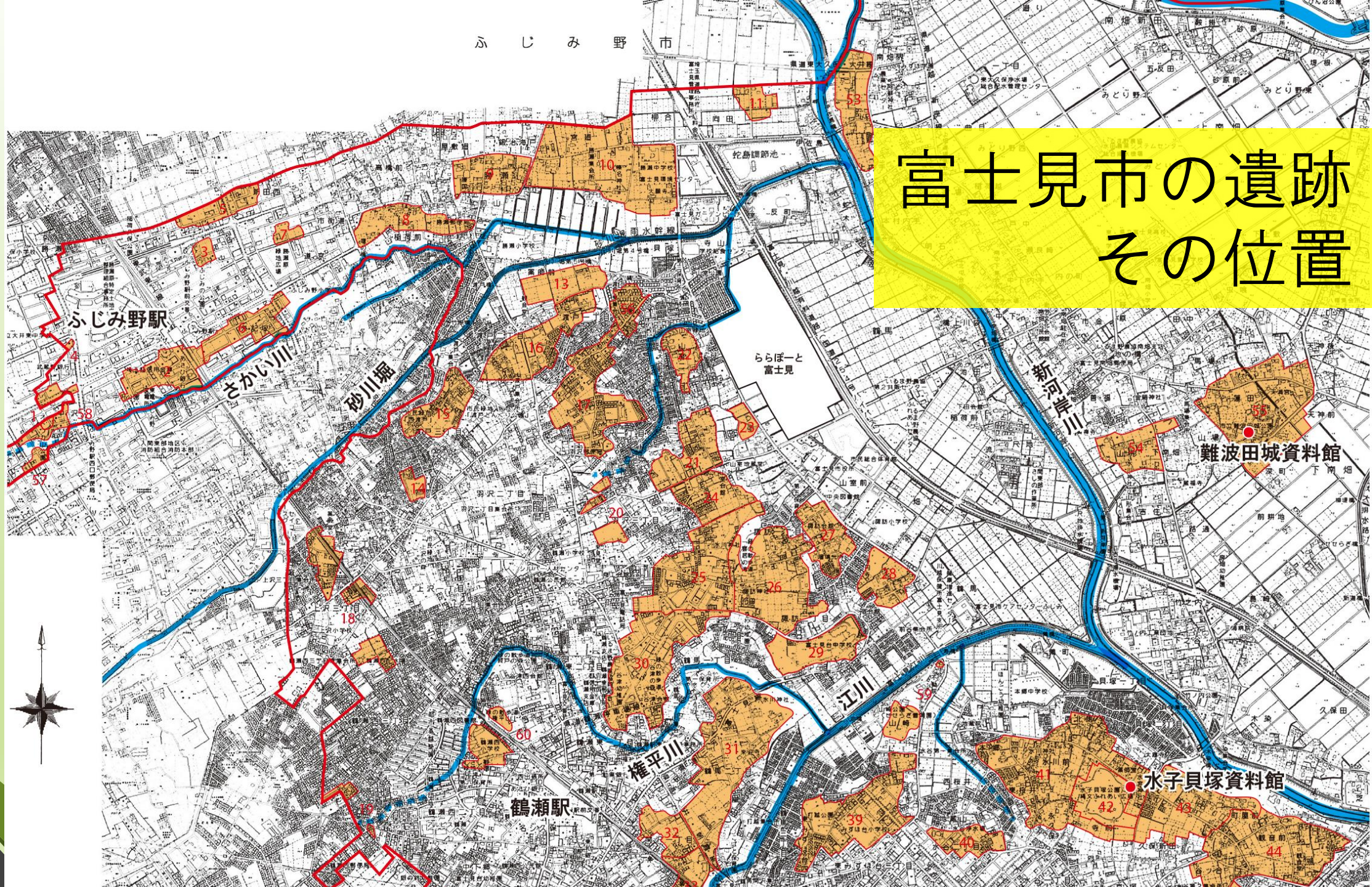
富士見市の遺跡 その位置



富士見市内の遺跡はどこに・・・

- ① 遺跡 ＝ 人の活動の痕跡が残る場所、住んでいた場所
- ② 人の活動、住んでいた場所に欠かせないもの → [水](#)
- ③ 水は、湧き水・小河川などから得る
- ④ 水を得やすい場所の近くを、人が住む場所を選ぶ
- ⑤ 住む場所が湧き水の近くや小河川沿いの台地上に集中
- ⑥ 結果的に水を得やすい場所の近くの台地上に遺跡が残る

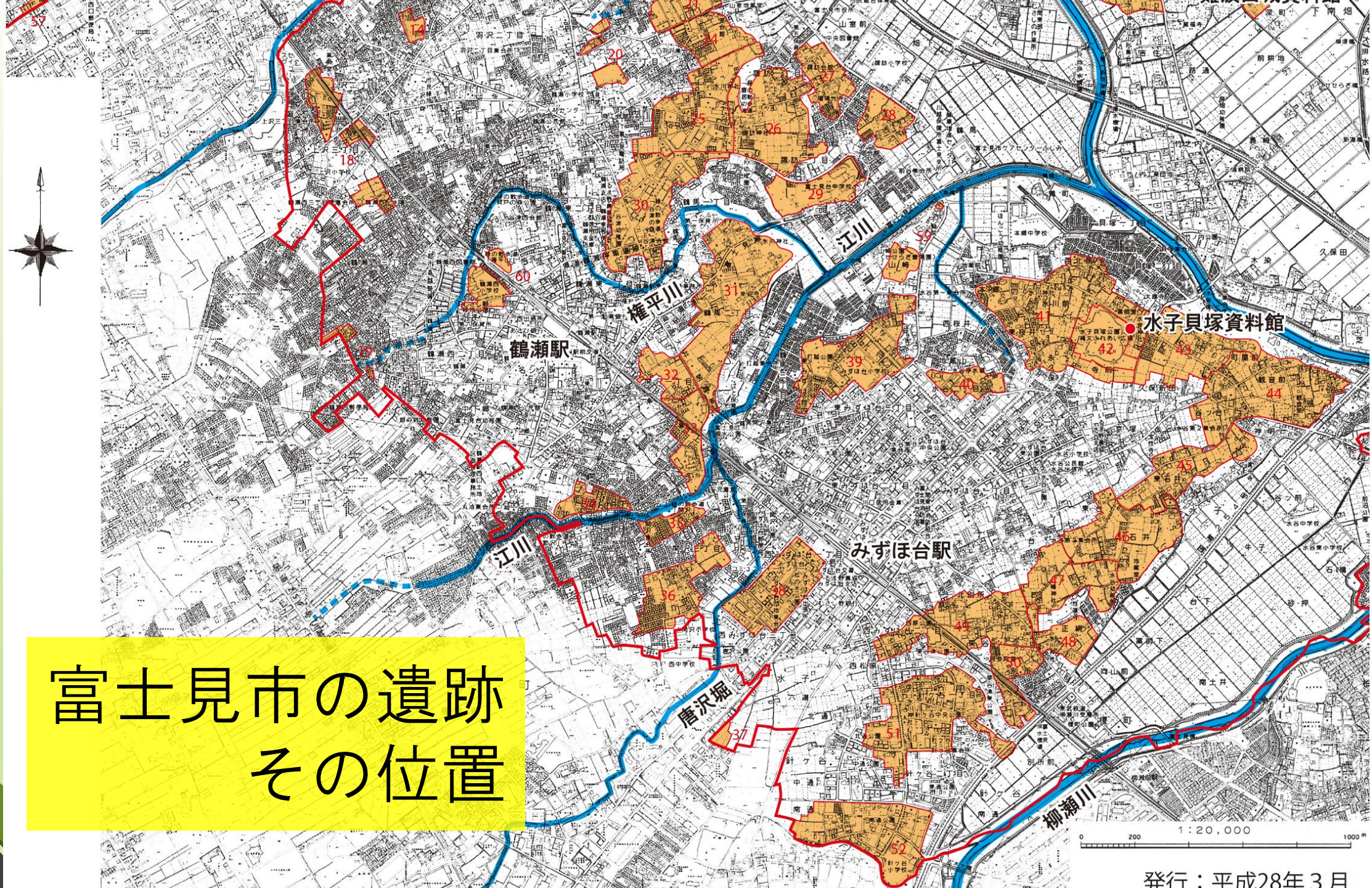
富士見市の遺跡 その位置



難波田城資料館

水子貝塚資料館

富士見市の遺跡 その位置



富士見市内の縄文時代の遺跡

- 縄文時代は

草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6時期に分けられている

草創期	16,000～11,500年前	早期	11,500～7,000年前
前期	7,000～5,500年前	中期	5,500～4,500年前
後期	4,500～3,200年前	晩期	3,200～2,800年前

富士見市内出土の縄文土器



草創期



早期



前期



中期



後期

富士見市内の縄文時代の遺跡

- 富士見市では

草創期　ハヶ上遺跡・羽沢遺跡・宮廻遺跡・南通遺跡など

早期　栗谷ッ遺跡・打越遺跡・氷川前遺跡・貝塚山遺跡など

前期　打越遺跡・水子貝塚・御庵遺跡・殿山遺跡・宮脇遺跡など

中期　羽沢遺跡・松ノ木遺跡・中沢遺跡・栗谷ッ遺跡など

後期　打越遺跡・本目遺跡など

晩期　正網遺跡

富士見市内の縄文時代の遺跡

- 富士見市では早期後半・前期・中期の遺跡が多い

草創期 遺跡数は少ないが、八ヶ上遺跡で良好な資料

早期 前半は栗谷ッ遺跡、後半は打越遺跡を初めとして遺跡が増加

前期 打越遺跡・水子貝塚などで貝塚を伴う大規模な集落が形成

中期 羽沢遺跡・松ノ木遺跡・中沢遺跡・栗谷ッ遺跡で環状集落

後期 打越遺跡で小規模なまとまり、全体的に遺跡数が減少する

晩期 ほとんどなく、これまでのところ正網遺跡のみ

縄文時代の自然環境の変化

- 縄文海進と海退 → 海の進入と後退に伴う変化。貝塚を形成
- 温暖化と寒冷化 → 樹林の変化 針葉樹林から落葉広葉樹へ
- 大規模火山噴火 → 約7,300年前に鬼界カルデラの大噴火
九州の縄文文化が約1,000年途絶

縄文時代の生活変化

- 土器の発明 → 煮炊きが可能になり、摂取する栄養が増大
- 弓矢の発明 → 飛び道具で、小動物を捕らえることが可能に
- 定住化 → 集落が形成される

関東地方は貝塚の密集地帯

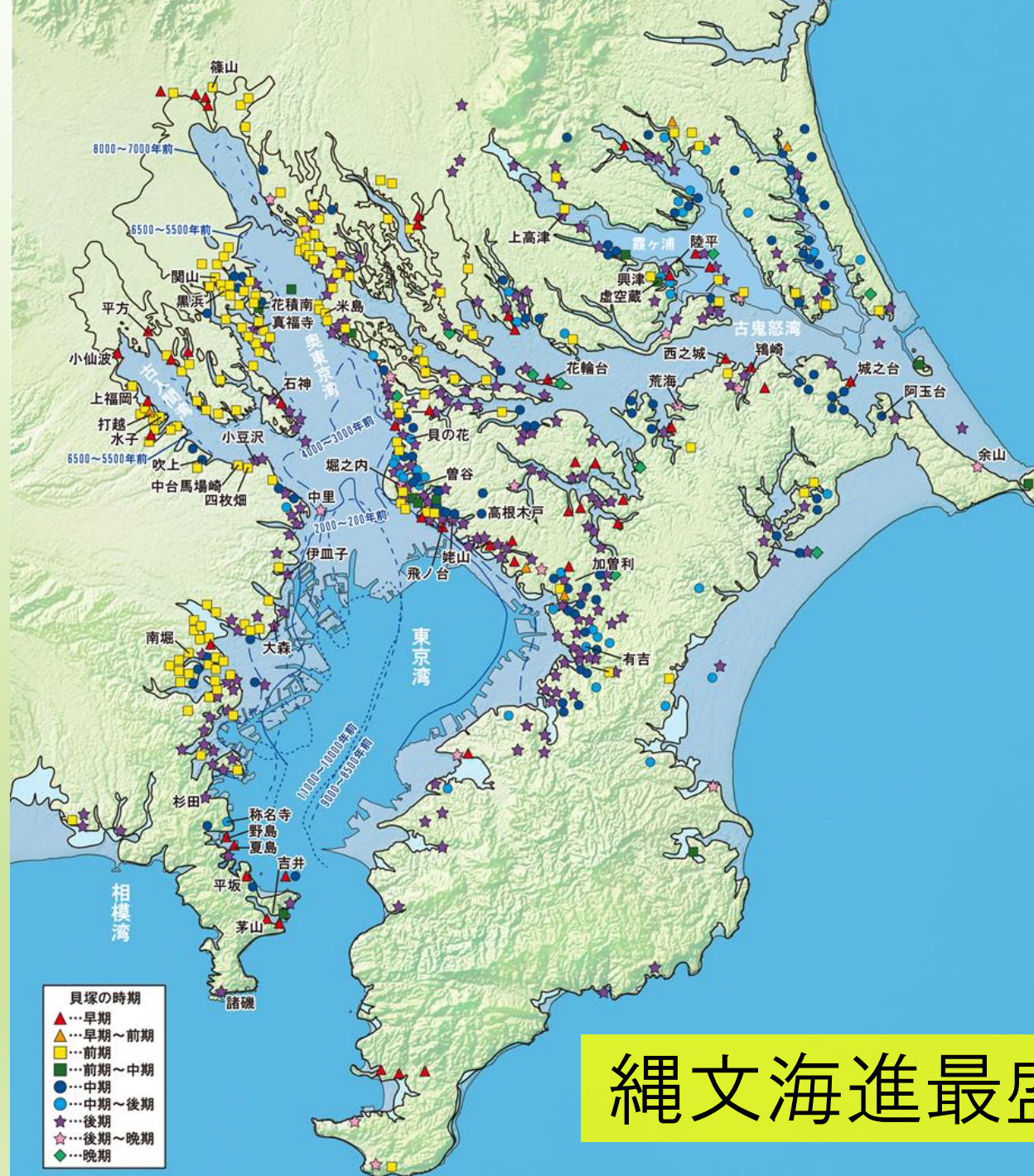
- 特に縄文時代の貝塚は日本全国に約 2,000ヶ所以上、約半分は関東地方に存在
- 現在の東京湾沿岸、東京湾から続く内陸部の奥東京湾や古入間湾、霞ヶ浦や現在の利根川流域に広がっていた古鬼怒湾周辺に多くの貝塚が見つかっている

海進・海退と関東地方の貝塚 1

- 地球の気候は、温暖期と寒冷期を約10万年サイクルで繰り返す。
- 縄文時代の前の旧石器時代は、寒冷期（氷河期）の終末期にあたる
- 海水面は現在の東京湾の海水面を基準として、120mも低い位置にあり、東京湾も陸地だった。
- 現在、群馬県から千葉県銚子市に向かって流れる利根川が、現在の荒川が流れる谷を通して東京湾方面に流れる
- 当時の利根川＝古期利根川の影響で、流域には狭く深い谷地形が形成された

海進・海退と関東地方の貝塚 2

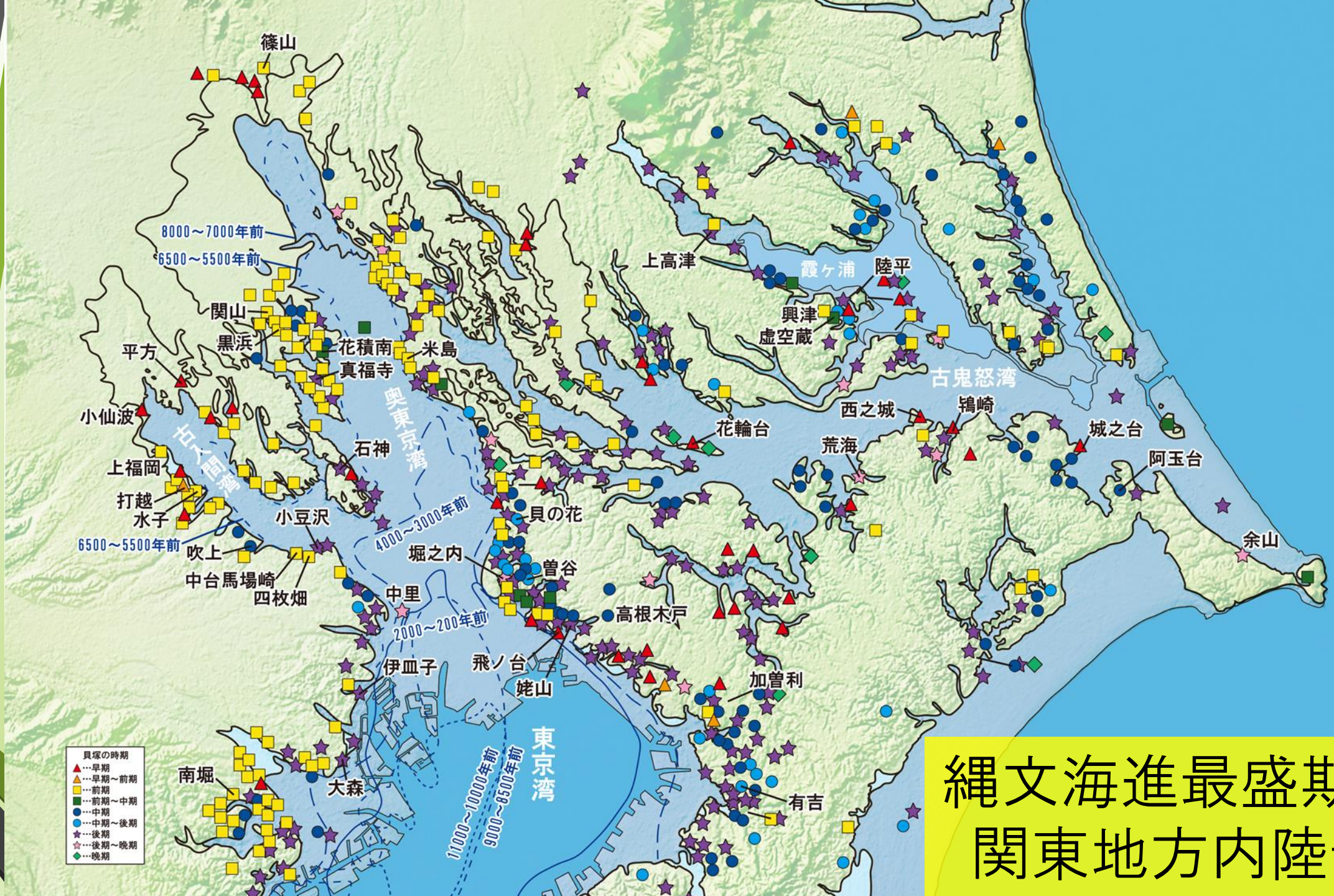
- 今から約18,000年前あたりから気候は温暖化に向かい、海面も徐々に上昇
- 約10,000年前の海水面は現在の東京湾を基準にして40m低い位置
- 約7,000年前の縄文時代前期になると海水面は現在より2～3m高い位置
- 古期利根川が深く刻んだ谷を逆上るようにして内陸部まで海が進入
- この現象を「海進」といい、縄文時代に起きた海進を「縄文海進」という



縄文海進最盛期の関東地方

海進・海退と関東地方の貝塚 3

- この頃、海が進出した関東地方内陸部に細長い 湾が形成される
- 奥東京湾・古入間湾・古鬼怒湾が形成される
- 縄文海進は約6,000～7,000年前の縄文時代前期前半にピークに達する
- その後、河川の土砂堆積作用により陸地化が進み、次第に海が退く
- この海が後退していく現象を海退といいます。



縄文海進最盛期の
関東地方内陸部

海進・海退と関東地方の貝塚4

- 縄文時代の関東地方は、海進、海退による海岸線の変化で、内陸部にも海があった
- 縄文時代早期に、現東京湾の形成された深い谷を逆上るように海が進出
- 海は内陸に大きく食い込んだ入り江の様な形になる。干潟も貝塚も小規模
- 約7,000年前には縄文海進が最盛期に達し、現在の渡良瀬遊水池あたりまで海が進出
- 縄文時代前期には、内陸部に進入した海は細長い湾の様な形になり、干潟が形成され、湾岸に多くの貝塚が形成された

海進・海退と関東地方の貝塚5

- その後、海進が一段落して、河川が運ぶ土砂の堆積作用などにより海岸線近くに干潟が発達
- 湾奥部や汽水域ではヤマトシジミ主体の貝塚が形成される
- 湾中央部や湾口部分では、泥質の干潟、砂質の干潟が形成され、貝塚では鹹水域（かんすいいき）のハマグリやサルボウなどが主体になる
- 汽水域の貝...ヤマトシジミ
- 鹹水域の貝...ハマグリ・カキ・サルボウなど

海進・海退と関東地方の貝塚 6

- 縄文時代前期中葉以降には海退に転じ、縄文時代中期中葉に埼玉県草加市あたりまで海岸線も後退
- 縄文時代中期には現在の東京湾沿岸や霞ヶ浦沿岸で、加曽利貝塚などを代表とする大規模な貝塚が形成される
- 縄文時代後期前半では海退が一段落。後期後半の3,500年前頃に再び海退に
- 鹹水域から汽水域に変化した湾奥部では、環境の変化にともない、ヤマトシジミ主体の貝塚が形成される

汽水域と鹹水域の貝

○^{かんすい}鹹水域と^{きすい}汽水域の貝

鹹水とは塩分を含んだ水のことで、その代表的なものが海水です。

鹹水と塩分を含まない淡水が混在した状態の水のことを汽水（塩分濃度3.5%以下）といいます。

汽水も塩分を含んでいるので広義には鹹水に含まれますが、川の水が海に注ぎ込む河口部には汽水域が広がります。

日本列島沿岸には現在およそ 6,000 種の貝が棲息しているといわれ、貝塚で普通に見かけるものは 100 種類程度、そのうち代表的なものは 20 種類程度といえます。

淡水・汽水・鹹水など水の状態、砂・泥・岩礁などその場所の状況で棲息する貝も違うため、貝塚の貝で、その場所の当時の状況がわかります。

場所	水域	底の性質	棲息している主な貝
淡水	淡水		カワニナ
内湾	汽水域	砂泥質	ヤマトシジミ
	鹹水域	砂泥質	マガキ, ハイガイ, オキシジミ
		泥質	アカガイ, ウラカガミ
		砂質	ハマグリ, アサリ, シオフキ, サルボウ
		岩礁	オオヘビガイ, マガキ
		砂礫質	イワガキ, イタボガキ, ウチムラサキ
外洋	鹹水域	砂泥質	チョウセンハマグリ, ベンケイガイ, コタマガイ
		岩礁	スガイ, イボニシ, レイシ, サザエ, カリガエガイ, イガイ, アワビ

貝塚から出土する貝の棲息域

汽水域と鹹水域の貝

- 水子貝塚の場合
- ヤマトシジミ主体
- カキ・ハマグリが10%
- その他、ハイガイなど
- 汽水域の貝が主体



汽水域と鹹水域の貝

- 陸平貝塚の場合
- ハマグリが主体
- カキ、アカニシなど
- ヤマトシジミはない
- 鹹水域の貝が主体



汽水域と鹹水域の貝

- 銚子市

余山貝塚の場合

- チョウセン

ハマグリが多い

- アワビ、カキ、
ベンケイガイ、
アカガイなど
外洋で採取される
貝も多い

- 種類が豊富

- 鹹水域、外洋の貝が主体



海進・海退と関東地方の貝塚 7

- 縄文時代以降でも、貝塚は弥生時代～近世まで見つかる
- 弥生時代以降の貝塚は、住居跡・土坑・地下式坑等から見つかるがごく小規模
- 貝を集落まで持ち込まず、海に近い所で作業を行うように変化

貝塚の調査

- 縄文時代の貝塚は、関東地方以外では、三陸海岸～仙台湾周辺、三河湾周辺、有明海沿岸などの集中域があり、それ以外の場所でも多くの貝塚が確認されている
- 大規模な貝塚が残された縄文時代の貝塚は、現在でも調査が行われている
- 有明海沿岸の佐賀市東名（ひがしみょう）貝塚は、縄文時代早期の網かごなどが見つかる
- 日本海側最大級の富山市小竹（おだけ）貝塚では、縄文時代前期の人骨多数の他に豊富な装飾品なども見つかる

貝塚とは 1

- 縄文時代の人々は、海進・海退という自然現象の時期に、海の豊かな恵みを利用しながら適応し、各時期で多くの貝塚が形成された
- 貝塚は、昔の人が採った貝の貝殻を、まとまって大量に捨てた跡
- 食料にしていた貝の貝殻の他に、魚・獣などの遺物の他に、土器・石器・骨角器などの道具類、人骨や犬骨など、他にもいろいろなモノが出土する
- いろいろなモノが出土するので、貝塚が当時の人たゴミ捨て場といわれる理由の一つ

貝塚とは2

- 貝塚には多くの遺物・資料が残されている
- 当時の**自然環境の情報**を含む貴重な場所
- 貝塚は**縄文人の生活や文化に関する情報**を提供する貴重な情報源



貝塚から出土する遺物

- 土器（壊れた土器、置きっ放しの土器）
- 石器・骨角器・装飾品類等の道具類
- 獣骨・魚骨・貝の生物類、堅菓類など
当時の人たちの食糧事情をうかがわせるもの
- 人骨・犬骨など



貝塚にいろいろなモノが残る理由

- 日本の土は酸性が強いため、有機物や人骨なども腐食させてしまい、残ることが少ない
- 貝塚の場合、堆積した貝が、酸性土壌の影響から遺物を保護して腐食を抑えたので残っている



貝塚の研究 1

- 貝塚の研究は、E.S.モースによって発見され、明治10（1877）年に発掘調査が行われた大森貝塚の調査にはじまる
- その後、佐々木忠次郎・飯島魁（いさお）により日本人として初めて発掘調査が行われた陸平（おかだいら）貝塚の調査が行われる
- その後、個人による貝塚の踏査的な研究などが行われる

貝塚の研究 2

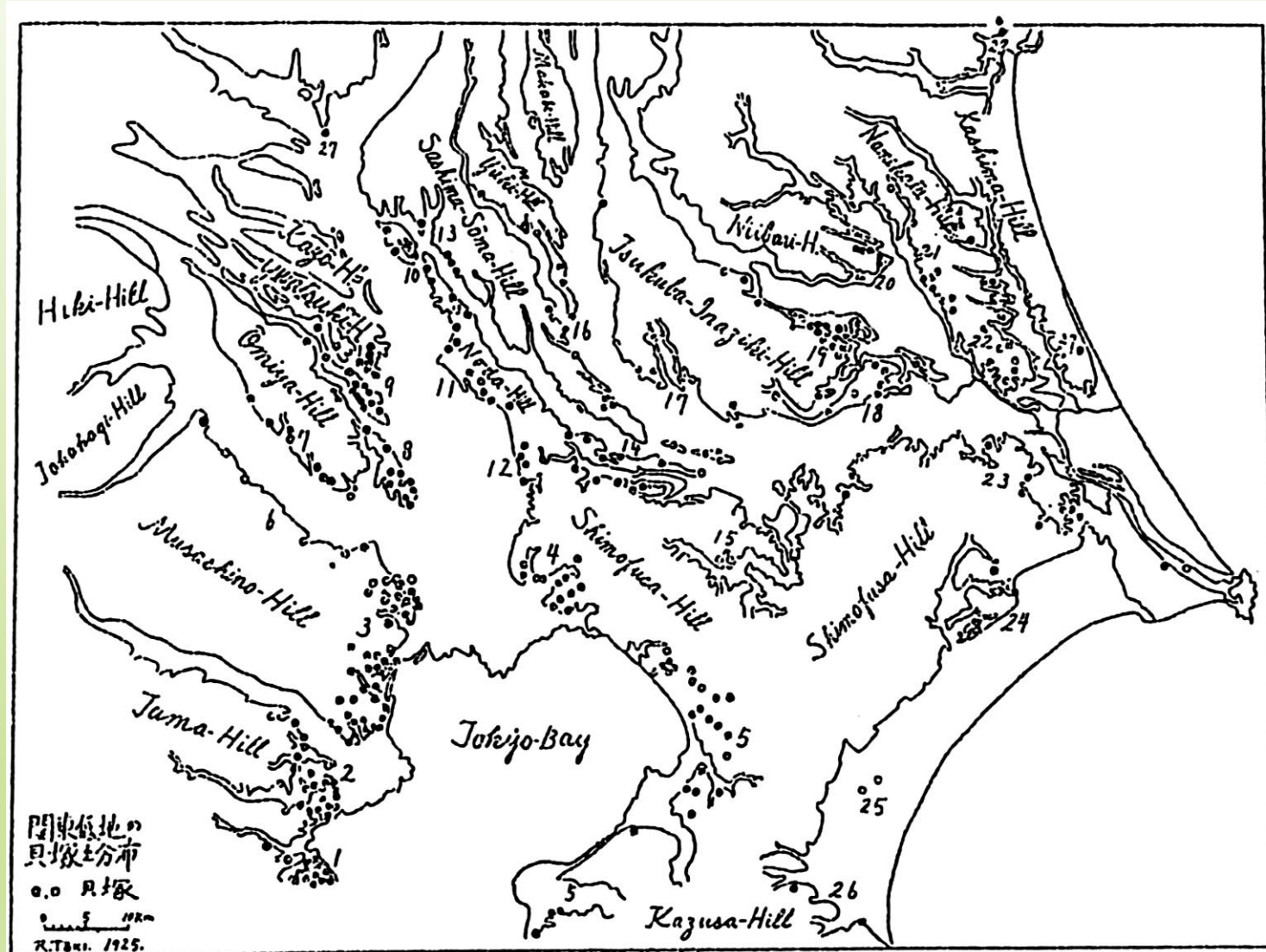
- 貝塚の持つ豊富な考古学情報が注目され、考古学研究において様々な役割を果たした
- 縄文土器編年研究、食料研究、集落研究、人骨研究など、様々な研究対象として発掘調査が行われた
- 現在では詳細な関東地方の貝塚分布とその特徴が明らかになってきている

貝塚の研究と土器編年

- 貝塚の貝層は層位的に区分ができるため、貝層中に含まれる土器から、縄文土器の編年 研究が大きく進展
- 貝塚調査によって得られた成果から、その 貝塚の名前がつけられた土器の型式名が名付けられている場合が多い
- 縄文時代早期前半の夏島式土器をはじめとして、**標識遺跡**になっている貝塚が多くある

古地形の復元

- 大正 15 (1926) 年、東木龍七（とうきりゅうしち）による貝塚の分布調査から旧海岸線を復元した研究により、結果的に縄文海進時の地形を復元することになった



東木龍七による古地形の復元と貝塚分布

富士見市の貝塚

- 富士見市で最初に形成された貝塚は、早期後半の針ヶ谷の北通遺跡
- 早期後半に小規模な貝塚が形成される

(北通・山室・貝塚山・
谷津・打越遺跡)

富士見市で
確認されている貝塚



No.	遺 跡 名	所 在 地	時 期	種別	出土状態	備 考・別 称
1	貝塚山	渡戸1	早期後半～前期？	地点	土坑	古墳の周溝から貝の堆積が見られた (別称) 渡戸の貝塚、渡戸貝塚、東渡戸 貝塚、貝塚山貝塚、鶴瀬貝塚、鶴馬貝 塚、鶴間貝塚
2	鍛冶海戸	勝瀬	前期中葉・黒浜式？	地点	住居1	試掘調査時に確認(平成26年)
3	山室	山室2	早期後半	地点	住居2	ヤマトシジミのみの貝塚 (別称) 折戸貝塚
4	宮脇	鶴馬1・羽沢3	前期中葉・黒浜式	地点	住居4・土坑？	(別称) 羽沢前遺跡
5	黒貝戸	諏訪2	前期中葉・黒浜式	地点	住居2	
6	殿山	諏訪2	前期前半～中葉	地点	住居 (関山3・黒浜10)	昭和35年・平成15年調査 (別称) 鶴間宿貝塚、宿貝塚、殿山貝塚
7	谷津	鶴馬1 鶴瀬東2	早期末葉	地点	住居・土坑	
8	御庵	鶴馬2	前期前半・関山式	地点	住居8	(別称) 谷津貝戸貝塚
9	八ヶ上	関沢1・2	前期中葉・黒浜式	地点	住居	
10	節沢	関沢3	前期中葉・黒浜式	地点	土坑1	平成15年調査
11	打越	東みすほ台3 水子	早期末葉～前期中葉	地点 斜面	住居・土坑 崖線下	(別称) 打越貝塚、山崎貝塚、東小原貝 塚
12	松山	水谷2・水子	前期前半～中葉	地点	住居1	(別称) 北松山遺跡
13	氷川前	水子	早期後半～末様	地点	土坑1	
14	水子貝塚	水子	前期中葉・黒浜式	地点	住居	昭和13・14・42年調査、国指定史跡 (別称) 水子大應寺前貝塚
15	東台・神明	水子		地点		貝散布、未調査
16	栗谷ッ	水子	前期中葉・黒浜式	地点	住居1	平成15年調査
17	北通	針ヶ谷1	早期後半～前期前半	地点	住居・炉穴	早期・炉穴の貝は生育の悪いハイガイ のみの非常に小さい貝塚。貝塚として は市内最古
18	南通	針ヶ谷2	前期前半・関山式	地点	住居3・土坑1	

富士見市を代表する2つの貝塚 「打越遺跡」と「水子貝塚」

- 富士見市で最初に形成された貝塚は、早期後半の針ヶ谷の北通遺跡
- 早期後半に小規模な貝塚が形成される
- （北通・山室・貝塚山・谷津・打越遺跡）
- 前期中葉までの、花積下層式、関山式、黒浜式で貝塚が形成
- 早期後半～関山式期...**打越遺跡（東みずほ台）**
- 黒浜式期～諸磯式期...**水子貝塚（大字水子）**

富士見市で 確認されている貝塚



前期・関山式期の打越遺跡 前期・黒浜式期の水子貝塚

- 地点貝塚
- 住居跡の竪穴を利用



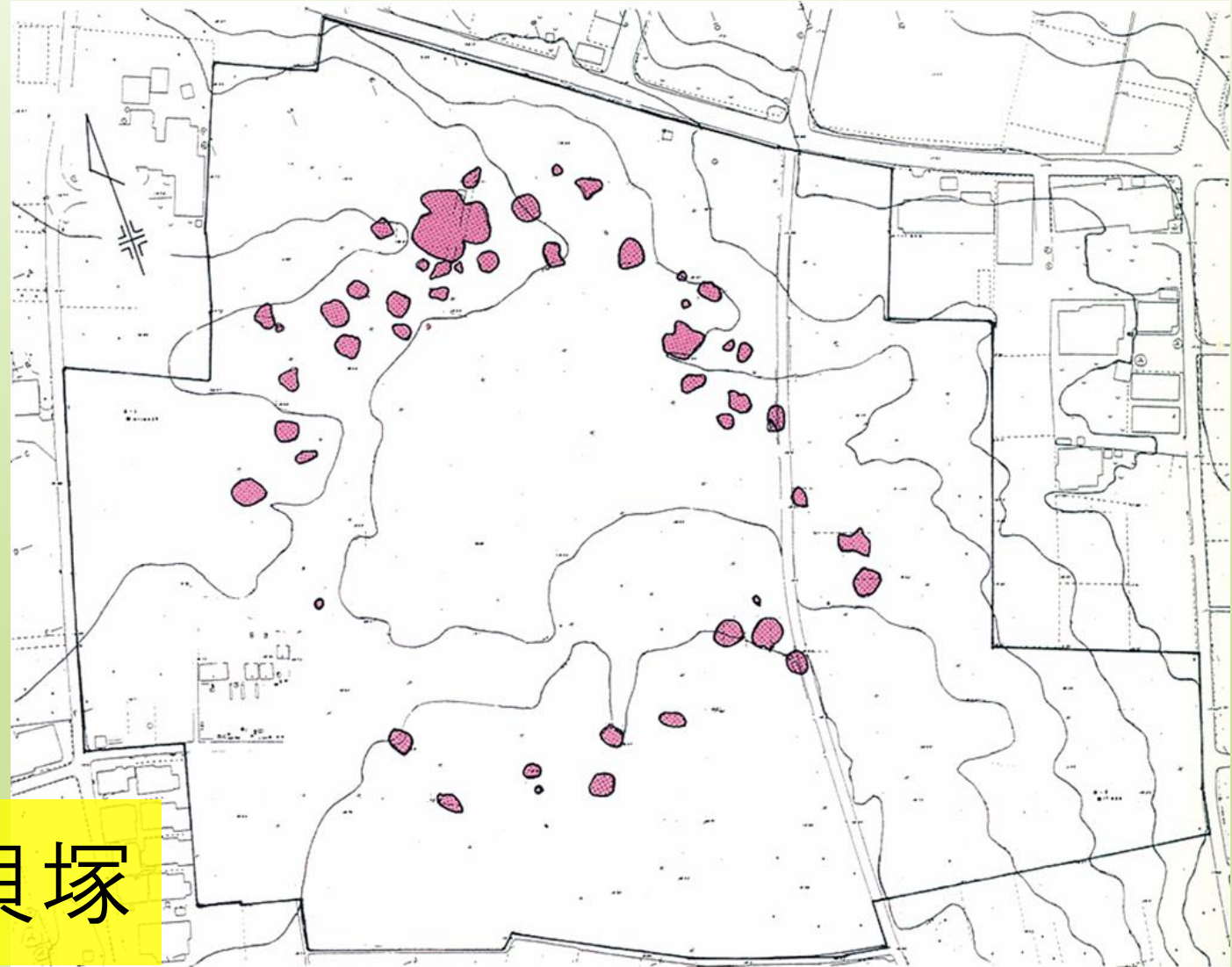
打越遺跡の地点貝塚



水子貝塚の地点貝塚

地点貝塚が環状に並ぶ水子貝塚

- 地点貝塚が環状に分布
- 住居跡の竖穴を利用したので集落跡と同じ環状に展開



水子貝塚の地点貝塚

水子貝塚の発見

○水子貝塚の発見と阿部^{あべ}正功^{まさこと}

水子貝塚の発見についてこれまでは、大正 6（1917）年、安部^{あんべ}立郎^{たつろう}氏が『日本人民遺物発見地名表』に「水谷村水子、大応寺前、貝畑 土器・石器」と記し、水子貝塚を“遺跡”として報告し、昭和 12（1937）年、酒詰仲男氏が水子貝塚を“貝塚”として発見した後、昭和 13（1938）年、東京考古学会縄文式部会による発掘調査、昭和 14（1939）年、東京帝国大学（現・東京大学）人類学教室による発掘調査という流れで調査研究が進んでいました。

しかし最近、新たに判明したことがあり、明治 27（1894）年 10 月、阿部正功氏が富士見市（当時は鶴馬村・水子村）を訪れ、翌明治 28（1895）年には『東京人類学会雑誌』に「石器時代遺跡地名表」として、次のように報告しています。

武蔵国入間郡 鶴間村字貝塚山 貝塚
同国 同郡 水子村字大王寺前 貝塚

「貝塚山」は富士見市渡戸の貝塚山遺跡、「大王寺前」とは、富士見市水子の「大応寺」前にある水子貝塚を表しており、迅速測図に貝塚を発見した位置を記入していることから、水子貝塚はこの時に発見されたことを表しています。阿部正功が訪れた際には、畑を踏査して歩き回り、100 m 四方以上の広がりを確認し、農夫に作業を頼んで試掘を行って層位を確かめ、主体となる貝は二枚貝のシジミであるということを確認していました。

阿部正功（1860～1925）氏は戊辰戦争後に若くして磐城棚倉藩の当主となり、明治維新後は磐城棚倉治藩事、廃藩置県後は華族（子爵）となっています。

明治 21 年頃から関東地方の遺跡踏査を行い、人類学例会で踏査成果を口頭で発表し、「地名表」を掲載していました。埼玉県内の花積・関山・黒浜・安行などの貝塚遺跡なども踏査して学会に発表している他、民俗関係にも関心を示し、明治 28 年以降は民俗関係の調査研究などを中心に行っています。

邸内に陳列場を開き、資産家として学会への経済的援助なども行っていました。

貝塚山とコロボツクルの碑

○富士見市のコロボツクルの碑

余山貝塚には銚子商業学校教諭であった吉野長太郎氏により「コロボツクル喰ひ遺したり四千年」の石碑が昭和8（1933）年に建てられました。

富士見市内の山室には、大正元年（1912）に建てられた「貝塚稻荷旧跡碑」があり、通称「コロボツクルの碑」と呼ばれています。

「貝塚稻荷旧跡碑」の貝塚稻荷とは、市内渡戸にかつてあった神社で、市内鶴馬の氷川神社へ合祀された後の明治43（1910）年、跡地を開墾した時に人骨と鉄刀（古墳時代）が発見されました。その後、人骨は神社に改葬され、鉄刀は発見者により帝室博物館（現・東京国立博物館）に寄贈されています。

また明治40（1907）年にこの地を訪れた東京帝国大学の学士十数名が採集された土器や石器を見て、これらは当時の学説でもあった「コロボツクルが残したものである」と地元の人たちに説明したことなど、「貝塚稻荷旧跡碑」にはこれらの顛末が記されています。

明治27（1894）年に阿部正功氏が訪れ報告している「鶴間村字貝塚山」の貝塚は、この「貝塚稻荷旧跡碑」があった場所であり、大正7（1918）年には鳥居龍蔵氏・大場磐雄氏、昭和3年（1928）には大山柏氏・甲野勇氏などが現地を訪れています。

人骨と鉄刀が出土した場所には古墳があつともものと推測されますが、阿部・大場・甲野のいずれもが周溝の内側に貝が見られたという記録を残していることから、古墳が築かれた場所の下に、縄文時代前期の貝塚があつたものと考えられます。



現在の「貝塚稻荷旧跡碑」



かつての「貝塚稻荷旧跡碑」（昭和30年代）

縄文文化の隆盛と衰退

- 市内で縄文時代前期中葉以降に貝塚はなくなる（海退の影響）
- 縄文時代中期に遺跡数は増加
- 市内でも集落（環状集落）が形成
 - 中沢遺跡（ふじみ野西）約80軒
 - 羽沢遺跡（羽沢1丁目）100軒以上
 - 松ノ木遺跡（西みずほ台）約40軒
- 縄文時代後期に武蔵野台地では遺跡数は減少、晩期の遺跡はさらに現象（寒冷化の影響？ 資源確保の困難）
弥生文化の受容につながる



羽沢遺跡の獣面突起付土器（県指定文化財）

弥生時代の自然環境の変化

- 弥生の小氷期 → 縄文時代後期から続く気候の寒冷化。
小海退により海岸付近の沼や湖が干上がる

弥生時代の生活変化

- 農耕のはじまり → 食料確保の手段が増える。自然改変・環境破壊
農耕サイクルにあわせた生活パターンの変化
- 金属器の使用 → 食料生産の増大。祭器・武器。石から金属へ
- 富の蓄積 → 格差・階層が生じる。
- 集団同士の争い → 争乱のはじまり。環壕集落の登場

富士見市内の弥生時代の遺跡

弥生時代は前期・中期・後期の3時期に分けられていた

前 期	2,300～ 2,200年前	中 期	2,200～2,000年前
後 期	2,000～ 1,750年前		

現在は早期を加えて、早期・前期・中期・後期の4時期に分けられる

早 期	3,000～ 2,800年前	前 期	2,800～2,400年前
中 期	2,400～ 1,900年前	後 期	1,900～1,750年前

富士見市内の弥生時代の遺跡

前期 なし

中期 針ヶ谷の**南通遺跡**でわずかに確認されている程度

後期 柳瀬川流域・水子地区の遺跡で大規模な集落が形成
谷津に水田を築き、その周辺に集落を形成

(柳瀬川流域) 南通・北通・東台・観音前遺跡など

環壕集落—南通遺跡、観音前遺跡

(水子地区) 氷川前・松山・打越遺跡など

(鶴馬地区) 大谷遺跡 水子地区より北側は極端に減少

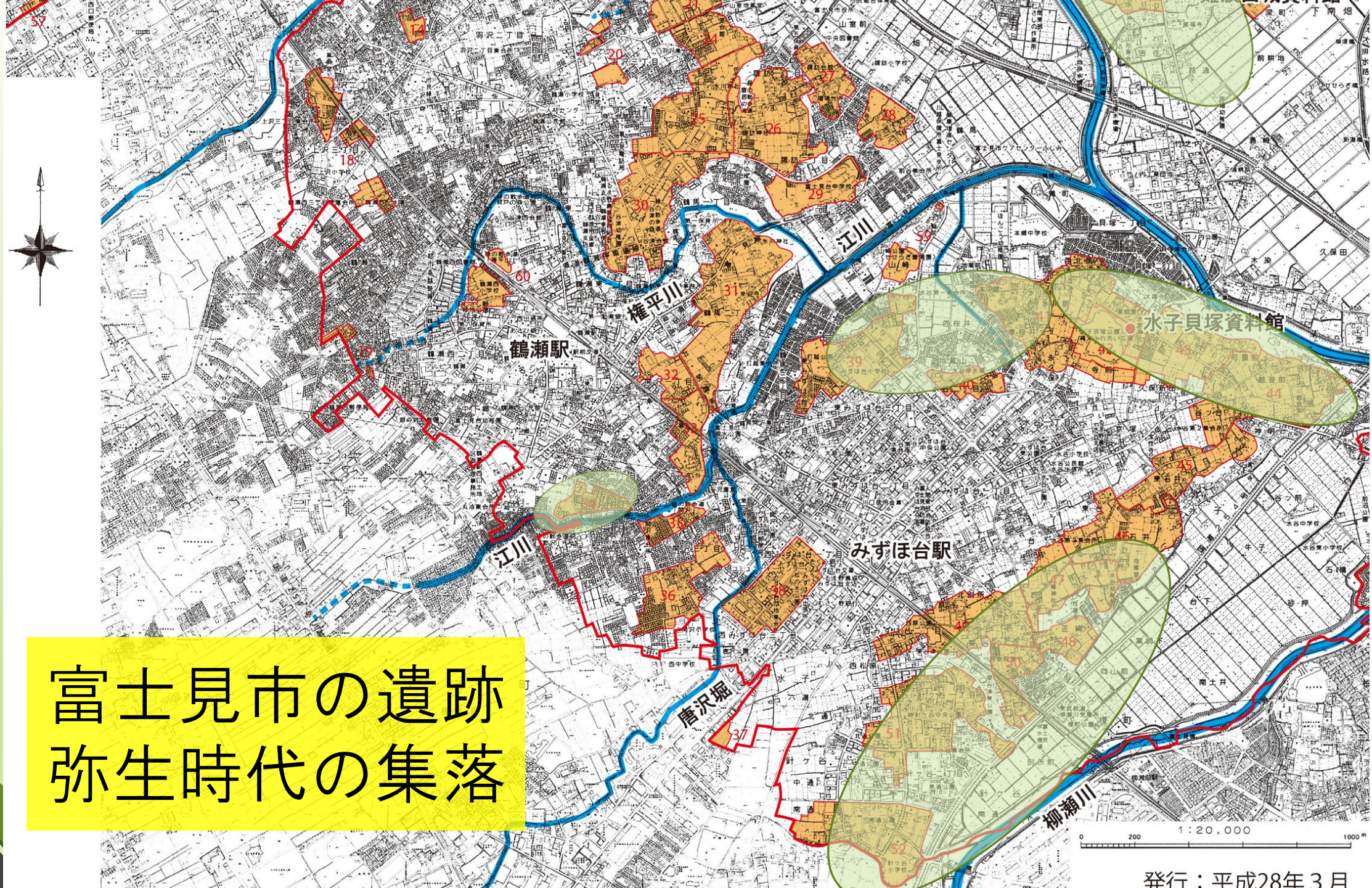
(南畑地区) 山形遺跡 低地部にも進出 山形遺跡で周溝墓

富士見市内の谷津田

- 写真は針ヶ谷の谷津田（昭和50年代）
- 谷津田・小河川沿いに水田をつくり、次第に低地部に拡大、進出



富士見市の遺跡 弥生時代の集落



富士見市内の弥生時代の遺跡

中 期 針ヶ谷の南通遺跡でわずかに確認されている程度

後 期 柳瀬川流域・水子地区の遺跡で大規模な集落が形成

環壕集落として南通遺跡、観音前遺跡がある

水子地区でも谷津田を中心にその周辺で見つかる

水子地区より北側は極端に減少 鶴馬地区一大谷遺跡

低地部分にも進出 南畑地区一山形遺跡で周溝墓

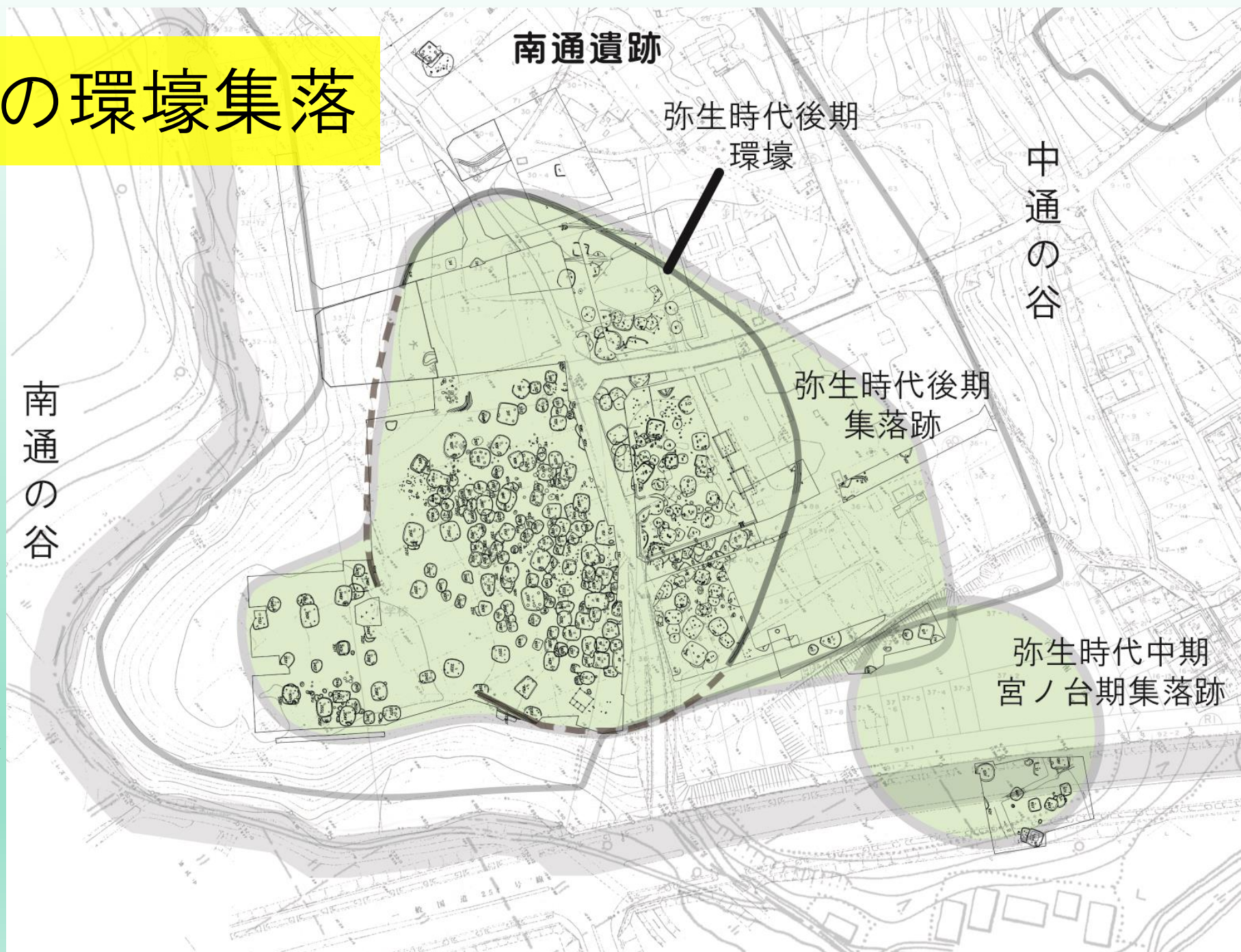
環壕集落と 方形周溝墓



南通遺跡の環壕集落

南通遺跡の環壕集落

環壕集落と
方形周溝墓



住居跡と出土遺物



北通遺跡の方形周溝墓

環壕集落と 方形周溝墓



北通遺跡の方形周溝墓

周溝墓群

環壕集落と
方形周溝墓





北通遺跡の方形周溝墓

環壕集落と
方形周溝墓





北通遺跡の方形周溝墓

環壕集落と
方形周溝墓



環壕集落と
方形周溝墓



北通遺跡の方形周溝墓



北通遺跡の方形周溝墓

環壕集落と
方形周溝墓



環壕集落と
方形周溝墓



北通遺跡の方形周溝墓

弥生時代から古墳時代へ

- 市内では弥生時代中期に弥生文化が波及し、後期から古墳時代初頭にかけて大規模な集落跡が形成される
- 集落跡は柳瀬川流域とその周辺の谷津田周辺に展開していた
- 集落跡に近い位置に方形周溝墓が築かれた（有力者の登場）
- 次第に低地部にも進出していった
- 古墳時代初頭以降～中期にかけては、市内では集落跡が途絶する
- 古墳時代後期に再び集落が形成されるが、中心は志木市にあり、次第に周辺に行動圏内が広がった結果と考えられる
- 奈良時代に律令制が整備されると、入間郡に属した富士見市では、行政単位でのまとまりで開発が進んでいった

邪馬台国

- 江戸時代後期より、その所在地をめぐって諸説が出されている
大和説 九州説 その他の場所（高天原・日本国外・日本国内）
- 新井白石 当初は大和説、九州の地に山門郡を見いだして九州説
- 本居宣長 卑弥呼は神功皇后、邪馬台国は大和説、朝貢は熊襲の偽僭説
- 内藤湖南 畿内説（京大派）
- 白鳥庫吉 九州説（東大派）

中国の史書に見る日本についての記述 2

- 『山海経』 B.C.4～A.D3 秦～漢 “倭は燕に属す”
- 『論衡』 A.D2末 周の末期 王充 “周の時 倭人が暢草を献ず”
- 『漢書 地理志』 後漢初頭 班固 楽浪海中有倭人 分為百余国 以歳時来献見云
- 『後漢書 東夷伝』 432年 范曄 A.D57年 倭奴国～印綬 A.D107年 倭国王 帥升
- 『三国志 倭人伝』 280～289年 陳寿 帯方郡東南大海の中 30国 A.D238年 倭弥呼
- 『晋書 東夷伝』 648年 倭弥呼の後に立った倭王壹興の朝貢

中国の史書に見る日本についての記述 2

- 『宋書 東夷伝』 439～502年 倭の五王（讃・珍・済・興・武）
- 『梁書 東夷伝』 636年
- 『隋書 倭国伝』 636年 王の多利思北孤が朝貢 対等外交？
- 旧『唐書 倭国伝』 945年 倭国は古くは倭奴国 新羅東南大海中にあり
- 旧『唐書 日本伝』 945年 日本国は倭国の別種～日本は旧小国 倭国を併せた
- 新『唐書 日本伝』 1060年 日本の王の姓は阿每氏 筑紫城にいた神武が大和に

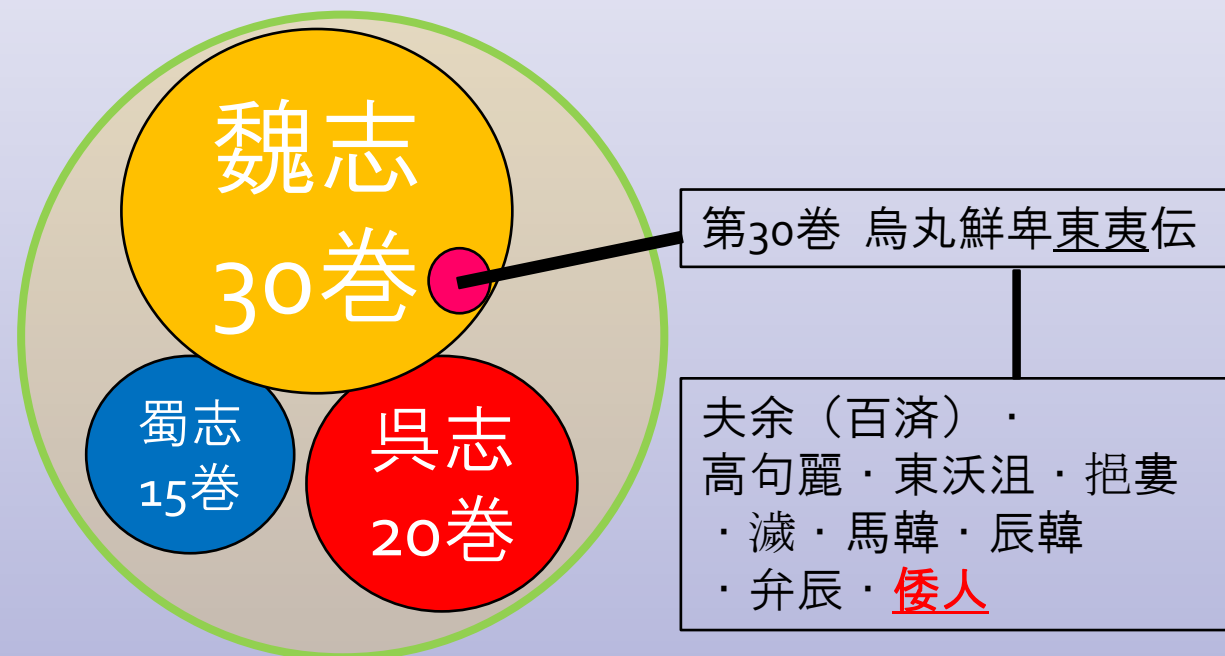
魏志倭人伝

- 『三国志』 魏志30巻 呉志20巻 蜀志15巻の合計65巻
- 280～289年 晋 の時に成立 陳寿が中心に編纂
- 「魏志倭人伝」 = 三国志一魏書一烏丸鮮卑東夷伝一倭人条
- 東夷伝 夫余（百済）・高句麗・東沃沮・挹婁・濊・馬韓・辰韓・弁辰・倭人
- 倭人条 約2,000字
- 三国志全体では約690,000字（本文約368,000字 注文約322,000字）

魏志倭人伝

- 倭人条 約2,000字（約0.3%）
- 三国志全体では約690,000字

	本文	約368,000字
	注文	約322,000字
魏志	本文	約207,000字
	注文	約215,000字
吳志	本文	約103,000字
	注文	約 65,000字
蜀志	本文	約 57,000字
	注文	約 42,000字



魏志倭人伝

- 「魏志倭人伝」は『三国志』全体の中では約0.3%の文字数ではあるが、他の東夷伝の諸国に比べて、約2,000文字は突出して多い
- “魏”を継承した“晋”の時に成立しているので、原史料も継承されている
- 東夷伝は、その国のおおよその位置と様子、これまでの交渉の経過などが記されているが、倭人伝の場合は、中心地域までたどり着くための距離と方位が多数掲載されており、他の諸国の扱いと異なっている
- 『漢書』では西方の国に行った行程記事が掲載されており、魏志倭人伝の行程記事も『三国志』の段階で東方の国にも勢力が及んだという誇示も含まれているか

魏志倭人伝

- 「魏志倭人伝」には当時の倭国の習俗なども掲載されている
鯨面＝入れ墨か？ 水没して魚貝を捕る＝海女さん
上位のものは重婚をしているが、下位のものはそれほど多くないなど
- 『三国志』では、中心国名は“邪馬壹国”（『後漢書』では“邪馬臺国”）
- 方向と距離、日数などの行程記事が掲載されているにもかかわらず、“邪馬壹国”の位置はまだ結論が出ていない

“邪馬壹国”の場所は

- 大和説の場合では、“南に向かう”を、“東に向かう”の間違いであると読み替えないとたどり着かない
- 九州説の場合だと、距離が長く、九州の南方海上まで行ってしまう
- いずれの説の場合でも、「記載に誤りがあった」、「誤認があった」などの当時の編者や情報取得に誤りがあったということではないと説明できない

“邪馬壹国”の場所は

- “里”の長さ 漢の時は約4 3 5 m
(ちなみに江戸時代の日本では約3. 9 km)
- 東夷伝韓伝に、“方四千里、南は倭と接する”とある
- 朝鮮半島の東西幅は約3 0 0 ~ 3 6 0 km
- 方四千里 = 3 0 0 ~ 3 6 0 km 一里 = 7 5 ~ 9 0 m 約1/4 ~ 1/5の距離
- この場合だと、九州北部で収まる

おわりに

- ご静聴ありがとうございました